

離島間は航空機を利用し、効率良く3島を巡ります

千歳発着6日間 機IterTour

奄美大島・沖永良部島・与論島～奄美群島訪問の旅

2026年 ご旅行期間とご旅行

12月14日(月)発～12月19日(土)着…¥378,500

お一人部屋利用追加料金¥78,000

ツアーのポイント

■12月の奄美群島は平均気温が15～20℃と温暖で過ごしやすく、台風の心配もほとんどない時期です。

■奄美大島、沖永良部島、そして鹿児島県最南端・与論島の**3島を巡る**ツアーです。船での移動は、沖永良部島～与論島(1時間40分)のみ。その他の島への移動はすべて**航空機を利用し**、観光時間を十分に確保しました。



多文化が交差する島々 奄美群島

奄美群島は、古くから日本本土と琉球王国との間に位置することで、**両文化の影響を受けながら独自の歴史と文化を育んできました**。その歴史は、本土との貝交易に始まり、琉球、薩摩藩、そしてアメリカ統治下を経て、日本への復帰を果たすという、非常に複雑で奥深いものです。奄美群島は、日本本土(九州)との間で夜光貝などの**貝製品の交易路(貝の道)の要衝**でした。12世紀後半から13世紀初頭には、中国産の陶磁器も引き揚げられており、中国との交易も確認されています。

7世紀後半から8世紀にかけての日本の歴史書には、「海見」「奄美」などと記され、大和朝廷に特産品を献上するなど、**緩やかな政治的関係**が維持されていました。

15世紀頃から沖縄本島に成立した**琉球王国が奄美群島を統治下に編入**し、政治、宗教、文化に大きな影響を与えました。与論島と沖永良部島は早くから琉球の支配下にありました。琉球王国の行政機構である「間切(まぎり)」が導入され、奄美大島は7つの間切に区分されていました。

1609年、薩摩藩は財源確保などを目的として奄美諸島・琉球へ侵攻し、**奄美群島は薩摩藩の支配下**に入りました。この時代は「大和世(やまとんゆ)」とも呼ばれます。薩摩藩は、黒砂糖が貴重な薬種として多大な収益をもたらしたため、奄美に黒糖だけを生産させる**モノカルチャー体制を強制**しました。これにより食料生産が乏しくなり、飢饉時には一家離散や村潰しが起こり、「家人(やんちゅ)」と呼ばれる人身的な隷属状態も生まれました。過酷な時代でも、奄美の人々は米を作り、芭蕉糸や材木を琉球に売って稼ぐなど、たくましく暮らしていました。薩摩藩は、大島、徳之島、沖永良部島、喜界島にそれぞれ代官所を設置し、支配を強化しました。幕末には、安政の大獄から逃れるため、**西郷隆盛が奄美大島に潜居**し、島の人々との交流が確認されています。

薩摩藩の奄美への支配はそのまま引き継がれ、県は**黒糖販売の独占**を図りました。しかし、明治中期には奄美は経済的に切り離され、独立経済が1940年まで続きました。

太平洋戦争では空爆があったものの、**米軍が上陸することなく戦争が終結**しました。しかし、戦後、奄美大島は米国による軍政下に置かれたましたが、沖縄が沖縄戦で焦土と化し米軍統治が続く中、奄美群島では祖国復帰を目指す運動が活発化しました。

1953年、住民の強い願いが実り、沖縄に先駆けて**日本への復帰**を果たしました。

このように、奄美群島は地理的な位置から度重なる支配を受けながらも、独自の文化を守り発展させてきました。その歴史は、**日本と沖縄の板挟みになりながらも、たくましく生き抜いてきた島の姿**を物語っています。

(注)貝の道:今から約2000年前の**弥生時代から古墳時代にかけて、沖縄や奄美を含む南西諸島で採れた貝が、日本本土へ交易品として運ばれたルート**を指します。この交易は800年以上もの間続いたとされています。



沖永良部島の昇竜洞は、**鹿児島県の天然記念物**に指定されている全長約3,500mにも及ぶ大規模な鍾乳洞です。そのうち約600mが一般公開されています。

地下水がサンゴ石灰岩を溶かしてできたもので、発達した鍾乳石が特徴です。特に石灰華は**全国最大級の規模**を誇ります。

天井から垂れ下がる無数の銀白色の鍾乳石は「東洋一」ともいわれる美しさで、ライトアップされた姿は神秘的です。「クリスマスツリー」や「音楽堂」、「カニの横歩き」など、様々な形をした鍾乳石や石筍(せきじゅん)があります。また、洞窟からは7世紀頃のものと思われる管玉(くだだま)を首にかけた2体の人骨が発見されており、遣唐使船で漂着した人ではないかと言われています。洞内にはその人骨を祀った昇竜神社の鳥居があり、悠久の時間を体感できます

昇竜洞は奄美群島国立公園の一部にも指定されていていつ大変美しい鍾乳洞です。

ご旅行条件

■募集人数/12名様定員
■最少催行人数/**6名様**
■お食事/朝食5回・昼食3回・夕食5回
■千歳空港より、全行程、社員添乗員同行
■トランク往復無料託送サービス
【ご自宅～空港～ご自宅】

※羽田発着¥10,000引き。
※現地の都合によりスケジュールが変更される場合がございます。その場合でも極力日程に従って旅行サービスがお受けになられるよう万全の手配努力を致します。

ご利用予定ホテル

■**奄美大島**[2泊]/ホテルティダムーン、ホテルカレッタ、奄美リゾートばしゃ山村(全て洋室) 奄美空港からバスで15分圏内。奄美大島北部に位置するリゾートホテルです。
■**沖永良部島**/おきのえらぶフローラルホテル 町の中心部にありながら目の前が海という絶好のロケーション(洋室、大浴場付き)
■**与論島**[2泊]/プリンシアリゾートヨロン 2022年にリニューアルオープンしたばかりの地中海風リゾートホテルです(洋室、直結ビーチ有)。
※上記または同等クラスとなります。

ご利用バス会社

■奄美大島/しまバス
■沖永良部島/えらぶ観光
■与論島/南陸運
※沖永良部島・与論島内はジャンボタクシーに分乗になる場合がございます。

	都市名	スケジュールと見どころ/お食事と宿泊地
1	千歳 羽田 奄美大島	スーツケース無料託送サービス ご自宅～空港 ■午前、千歳空港より、日本航空にて羽田を経由し、奄美空港へ[08:50発/13:45着]。 ■着後、「日本のゴーギャン」として知られる 田中一村記念美術館 を見学します。田中一村(1905～1977)は、奄美大島の自然をこよなく愛し、その植物や鳥を鋭い観察と画力で力強くも繊細な花鳥画に描いた孤高の日本画家です。 《 奄美大島に連泊です 》 ☒ ・ ☒ ・ ☒ [奄美大島泊]
2	奄美大島	■午前、大島紬の製造過程が見学できる 大島紬村 、奄美の歴史がわかる奄美博物館(アマミノクロウサギの剥製や「死の棘」の小説家・島屋敏雄の展示もされています)、奄美近海の海の生物に出会える大浜海浜公園・海洋展示館を観光します。 ■午後、大島海峡が見渡せる高知山展望台へご案内したのち、奄美大島国立観光公園にて、 マングローブ原生林でのカヌー体験 もお楽しみください。80代の方でもお乗りいただけるカヌー体験です。 ☒ ・ ☒ ・ ☒ [奄美大島泊]
3	奄美大島 徳之島 沖永良部島	■午前、日本航空より、徳之島空港で乗り継ぎ、 『洞窟の聖地』沖永良部島 へ[10:55発/12:25着]。 ■着後、沖永良部島の観光。鹿児島県の天然記念物に指定されている大山・ 昇竜洞 や純琉球式が残る 世之主の墓 、南西諸島の伝統的な織物・芭蕉布の工房での製造過程の見学へご案内します。 ☒ ・ ☒ ・ ☒ [沖永良部島泊]
4	沖永良部島 与論島	■午前、引き続き島内観光です。自生ソテツが群生している ソテツのジャングル 、 日本一のガジュマル 、潮吹き洞窟フーチャなどへご案内します。 ■午後、和泊港より、フェリーにて与論ブルーで知られる 与論島 へ[12:00発/13:40着]。 ■着後、専用車にて、島内観光です。亀の形をしたウエルカメや与論駅、赤崎鍾乳洞、 与論民俗村 へご案内します。 《 与論島に連泊です 》 ☒ ・ ☒ ・ ☒ [与論島泊]
5	与論島	■終日、与論島内観光。沖縄本島・伊江島・沖永良部島などが見える 舵引き丘 、与論城跡とサザンクロスセンター、按司根津栄神社、 グラスボートツアー 、亜熱帯植物の宝庫・ユンヌ楽園、祖国復帰記念碑、島で最も賑わう与論町の散策へご案内いたします。 ☒ ・ ☒ ・ ☒ [与論島泊]
6	与論島 那覇 羽田 千歳	■午前、出発まで自由行動。島での滞在をお楽しみください。 ■午後、航空機にて那覇空港へ[12:30発/13:10着]。 ■着後、日本航空にて、羽田空港を経由し、千歳へ。着後、解散[18:35着]。 スーツケース無料託送サービス ご自宅～空港 ☒ ・ ☒ ・ ☒

※表記の「○」はお食事の有無を示します。「×」の食事は含まれておりません。

奄美を愛した孤高の画家・田中一村

田中一村(たなか いっそん、1908-1977)は、日本画家として知られ、奄美大島の**亜熱帯の自然や動植物を独特の画風で描いた**画家です。1908年、栃木県で木彫家の父・田中稻邨(いなむら)の長男として生まれ、本名は田中孝(たかし)といいます。

幼い頃から南画(水墨画)に**天才的な才能を発揮し**、「神童」と呼ばれました。東京美術学校(現在の東京藝術大学)に入学するものの、わずか2か月余りで中退し、その後は画家として活動しました。

1958年、50歳で**単身奄美大島に移住**します。移住の背景には、心臓が悪かった一村が、温暖な気候の奄美で心ゆくまで絵を描きたいと願ったためだという説もあります。奄美大島では、紬工場で染色工として働き、その蓄えて絵を描くという生活を繰り返しました。

亜熱帯の植物や動物を題材に、鮮やかな色彩と大胆な構図、精緻なデッサンで唯一無二の世界を創り上げました。特に最晩年の作品は、強い生命力を宿した傑作として知られています。生涯を通して無名の画家であり続けましたが、絵を描くことへの情熱は不屈でした。1977年、69歳で夕食の準備中に心不全で倒れ、誰にも看取られずにその生涯を終えました。

生前はあまり評価されませんでしたが、没後、1979年の遺作展や1984年のNHK「日曜美術館」での特集をきっかけに全国的に注目されるようになりました。現在では「日本のゴーギャン」とも称されています。田中一村は、逆境の中でも自らの芸術を追求し続け、奄美大島の豊かな自然を通して独自の美を表現した、まさに「不屈の情熱の軌跡」を生きた画家と言えるでしょう。

